

俳優

サヘル・ローズさん

「波乱万丈」—— サヘル・ローズさんの生い立ちの話を知ると、この言葉が浮かびます。孤児院、虐待、路上生活、いじめ・・・あまりに過酷な現実。そして、養母のフローラ・ジャスミンさんを始めとする人々との出会い。

俳優として活躍する一方で、難民や児童養護施設の子どもたちなどの支援を続けるサヘルさんのお話は、一言ひとことが大切なメッセージを含んでいるように感じました。

聞き手・構成：伊藤敬史

写真撮影：坂 仁根



—— サヘルさんは、4歳の時にイラン・イラク戦争の最中ご家族を失われて、孤児になられたということですね。

そうですが、戦争を生き延びた当事者に突き付けられていく現実が試練の連続です。心の部品を落としてしまっている感覚で。でも私は運が良かったです。多くの人が亡くなった中で生き延び、施設で衣食住を与えてもらいました。そして、7歳の時に今の養母のフローラ・ジャスミンと出会います。当時、フローラは結婚していました。イランでの養子縁組の条件が『子どもを授かることができない』ことが必須だった。私を引き取るためにフローラは自ら子どもが産めない体に手術をしたのです。そこまでは、私の養母になってくれた。それはすごい覚悟だったと思うのです。

—— 本当にそうですね。

イランでは革命が起きて、女性たちの自由が奪われて、その後戦争が起きました。養母はもともとテヘラン大学院生で、あと少しで卒業して教授になれたのに、時代に翻弄されて、レスキュー隊員ボランティアをしていました。その中で養母が見た景色は、過酷以外なかったと思います。だから私と出会った時に、この子は救わなければいけないと思ったのだと思います。

—— 8歳の時、フローラさんと一緒に日本に来られたのですね。

はい。彼女の夫は日本で働きながら大学に通っていたので、家族滞在のビザが取れました。義父が空港に迎えに来てくれて、埼玉のワンルームで共同生活を始め、私は近くの小学校に通いました。

—— その後、義理のお父さんから虐待があったのですか。

そうです。ただ、いちがいに義父が悪いわけではありません。普通、家庭で育っていたら、自然と小さい頃からいろいろと教われますが、私は施設の中で大事な幼少期を過ごしていたので、それができていない。ですから、物を壊す、暴言を吐く、盗むといった「試し行動」を沢山しました。

義父はそれを受け入れるのが難しかったと思います。外国の方々が日本で生活する場合、子どもは言語を吸収して社会に馴染んでいくスピードが速いですが、大人はそれが難しい。社会の中で孤立しがちです。外国籍に限らず、大人がため込んだストレスは、家の中の小さな子どもに向かってしまうことがあります。そしてそれがエスカレートし、虐待になるんです。

映画の『ジョーカー』がわかりやすい。ジョーカーは、最初から悪者ではなかったけど、社会が彼を悪者にさ

せた。善と悪の構造を作るのは簡単だけれども、その一つ一つの言動の背景には理由がある。どうしてそういうことが起きたのかは、背景を深く見ないとわからないですよ。たぶんそれは弁護士の世界に通じると思うんですけど。

—— まさにそうですね。

話がそれてごめんさい。義父からの虐待は日に日にひどくなりました。最初のころはスプーンを火であぶって体に押し付けられる。そして殴られる。母の前でも、お風呂場に監禁されたりするようになりました。

母は私を守るために家を飛び出し、2週間路上生活を2人でしました。

—— 公園で寝泊まりをしながら、フローラさんは公園から仕事に行き、サヘルさんは公園から小学校に通う生活だったのですね。その中で、助けてくださる方との出会いがあったのですか。

はい。連日母とスーパーの試食コーナーに食べに行っていたのですが、ある時、試食コーナーのおばあさんに呼び止められ、大きな紙袋を渡されました。私たちの生活が大変だと思ってくれたのか、おうちから持ってきた食べものをありったけ入れて、渡してくれたんです。すごく救われました。

それと、学校の給食のおばちゃんが、私が毎日同じ格好で学校に通っていたのに違和感を感じ声をかけてくれたのです。そして私たち親子を自宅に泊めてくれました。

また、家族滞在のビザから他のビザに切り替えなければ私たちは日本に残れませんでした。給食のおばちゃんは、その事情を知ると、弁護士費用を全部出して弁護士を頼んでくれました。養母がペルシャ絨毯を織れるということで技能ビザに変更するサポートしてくれたのです。また、身元保証人にまでなってくれました。

—— それはすごいことです。

すごいことです。

在留期間1年のビザが取れて、毎年更新日の前に入管に行かなければいけないのですが、その日が近づくと体が震えるんです。なぜかという、技能ビザでは、年収が重要なのですが、日本では絨毯織りの機会は

そんなになので、年収が追いつかないんです。入管は、窓口で誰に当たるかで全然違うので、毎回、どうなるかわからなくて本当に怖かった。今でもよく覚えているのが、震えていた母の小さな手。

—— それは怖いですね。

怖いです。国に帰れない事情を抱えているということは本当にあるんです。特に母の場合、離婚して、イランの法律ではシングルマザーでは私を育てられないので、あのままイランに戻れば、私は施設に戻されてしまう。帰ったら私たちは引き離されてしまう。私の未来を守るためにも帰りたくなかった。

—— それは切実な事情ですね。

脱線してしまいましたが、日本では「出稼ぎ」という言葉をよく耳にします。私はその言葉が嫌い。その国で働けない事情、男女の状況、独裁政権から命からがら逃れてきたりという事情、多くのことを抱えて人は生きていかなければならない。日本なら助けてくれると思って来ているんです。

私たちは幸い日本で助けてもらえたけれども、29年経った現代の日本社会は受け入れることに拒絶的になってきた気がしています。

また、もう一つ辛いのは、私たちアジアの人が多く経験していること。外を歩いていると、何もしていないのに警察に職務質問をされ、かばんの中を見られるんです。とても悲しい風景が毎日、どこかで繰り返し広がられている現実があります。

—— 最近、東京弁護士会でもレイシャル・プロファイリングの調査をして、外国の方々が不当な職務質問を受ける実態を問題提起していました。

そうなんですよ。実は私の養母は、日本語検定1級を取って、弁護士業界や裁判所で通訳をしています。私は、通訳するわけではありませんが、事例として知りたくて、この間も裁判所に傍聴しに行きました。時々、通訳の方が間違えて通訳をしてしまう。しかしそのまま、判決が決まってしまうことがあります。

—— 発言した本人も、通訳された言葉がわからないので、通訳が間違っていると指摘できないし、裁判官や弁護士も、日本語になったものしかわからないので、検証でき

ないんですね。

だからこそ法廷通訳は、試験1つで合格ではなくて、レベルを見極めて、案件ごとに、合う、合わないを決める必要があると考えます。より正しい判決をするために、裁判所の通訳研修は変えなきゃいけないと思います。

—— おっしゃる通りだと思います。学校の中でいじめや差別はありましたか。

残念ながら、はい。中学校時代は、偽造テレホンカードや覚醒剤でイランの人が捕まるニュースが流れていた時期だったので、クラスで、「捕まったのお前の親だろう」、「お前も不法滞在者だろう」、「薬をやっているんだろう」、「テレカ売ってくれよ」とエスカレートしていきました。

誰だって、自分の国を否定され、親を馬鹿にされ、自分自身をも否定されるのは辛いです。ある日、先生に相談をしたら、「気にし過ぎだ」、「冗談なんだから」と。そうか、これは冗談なんだ、私が繊細過ぎるんだ、じゃあ飲み込もうと黙ると、逆にエスカレートしていきました。

そこから今度は無視が始まりました。そして、ばい菌ゲーム。肩が当たると、「サヘル菌が付いた」、「腐りだした」と、笑いながら言われ続ける日々。靴を捨てられる、階段から蹴飛ばされる、話し出したらきりがないほどです。

でもあの年齢の子もって、いじめられていることを親に言えないんです。私の場合は必死で働いている養母に心配を掛けたくなかったので、ずっとごまかしていました。でもそれも3年間続くと疲れ切ってしまって、3年生の時に、自殺を図ろうとしました。

その日、早退をして家に帰ったら、養母が家にいたんです。初めて母が泣いている姿を見ました。「どうしたの?」と聞くと、「疲れた、しんどいよ」と養母は言いました。それまでの養母は、1週間食事代が500円しかなくても、「ほら500円もあるよ」と、どんな過酷な状況でもポジティブ。入管に行くたびに足が震えても、「絶対大丈夫」と強くて。でも、そんな養母が初めて「しんどい」と言ってくれた。おかげで「私もしんどい」と言えたんです。強さで対話しようとする、相手は心を開けないけれども、その人自身の弱さを出すと、本当に苦しんでいる人の心には本音が届き、

心を開ききっかけになるんですよね。

あの日母に、「死にたい」と伝えたら、母は「いいよ。でも一緒にいくよ」と言ってくれたんです。その時、すごくうれしかった。死なせてくれる。これで最後だと思って抱き締めた養母は、骨と皮だけだった。

いつの間にか、こんなに小さくなって、ボロボロで、トイレもお風呂もない家で生活して、床掃除やトイレ掃除の仕事をひたすらしながら、時たま絨毯を織りに行く。生活が信じられないくらいぎりぎりの中で必死に働いて、異国の地で養母はプライドを全部捨て、私のために、大学にまで行くためのお金を頑張って貯めてくれていた。

死のうとした瞬間、私は彼女に「ありがとう」と言ったことがないと気づいたんです。やってもらって当たり前と思っていたけど、そうじゃない。やってもらって当たり前のことなんてない。誰かがいて、自分が存在できているということを、死に片足を入れた瞬間に気づけたんです。その時です、本当に親子になったのは。養母から自分の中で母になった瞬間。

—— サヘルさんが、今いじめに遭っている子たちに伝えたいことってどんなことでしょうか。

自分を悪いと絶対に思わないでね。

頑張らなくていいからね。

今置かれている状況があなたのすべてじゃない。世界には、もっともっと、あなたが出会うべき人がいるよ。

それにね、死んでしまったら復讐にも何にもならない。

学校がすべてじゃない。行きたくなかったら行かなくていい。いくつになっても挑戦できるし、自分の道は自分で切り開けるから。

今、友達がいなくてもいい。その時間を図書館に行って本を読めばいいさ。本はあなたを否定しないし、逆に本はあなたに引き出しをくれるし、知識をくれる。あなたがいろいろなものを吸収していれば、あなたが大人になった時に、一気に発揮できる。だから隣の芝生とあなたを比較する必要はない。

—— 心に響くメッセージ、ありがとうございます。話が変わりますが、サヘルさんが俳優になりたいと思われたのはいつ頃ですか。

実は、高校に入って、大学の学費のためにエキストラのバイトをしたのですが、求められる多くのケースは

白人の方々なので、オーディションを落ち続けていました。唯一できたことが死体。そう、6年ぐらい死体役ばかりでした。でも時たま、テロリスト役が回ってくるようになりました。辛かった。何でテロリストのときだけ、中東の人なのか。それが悔しくて。偏った報道によって被害を受けるのは、異国の地で懸命に生きているその国の方々なのです。でもそのおかげで、日本でのイランのイメージを変えたいと思うようになったんです。

大学で就職活動をする時に、本気で表現の世界をやりたいと思いました。イランのイメージを変えたい。そして母の名前を歴史に残したい。血のつながりがなくても1人の女性が施設にいた私をここまで引っ張り上げてくれた。これって奇跡だと思うんです。だから母への恩返しとして、フローラ・ジャスミンという名前を歴史に刻みたい。

そしてもう1つ、社会に問題提起をするには無名だと誰も耳を傾けてくれない。社会に何の影響もない。自分の発信したいことに力を付ける。そのために私が電波塔になろうと思ったのです。

私が尊敬するチャップリンは、幼少期は貧困、母親の精神病、施設での生活など悲劇の連続。アメリカでもすごい人種差別を受けたといいます。だけど彼は、表現を通して、世界へ様々な問題を訴えかけたんです。私も表現を通じてそういうことやりたい。

私が発信することで、今、苦しい状況に置かれている子どもたちが、自分の生い立ちを認めることにつながればいいと思います。自分がロールモデルにならないと、次のロールモデルは生まれない。私が自分を提示するのはそのためです。でなければ、本来は静かに山奥に入りたいぐらい(笑)。

—— 本当にサヘルさんは、ロールモデルになっていらっしゃるんですね。先日、「サヘル・ローズ ^おせっかい、が希望をつなぐ」(BS朝日)という番組で、児童養護施設出身の方々をイランの家庭料理に招待する取組みが紹介されていましたが、皆さん、サヘルさんにつながる中で、自分も頑張れると思われたと思います。

そう言うてくださるのはすごくうれしいです。

国籍とか関係なく、心で向き合うことで誰かの支えになれます。それは日本のおせっかい文化が私に教えてくれたこと。給食のおばちゃん、ご飯を食べさせて

くださった方、永住権をとったときの弁護士さん、母が同僚に騙されてしまったときに助けてくれた弁護士さん。

こうやって話してみても、改めて、沢山の方が支えてくれている人生だとつくづく思いますね。

—— 今後の夢を伺ってもよろしいですか。

夢ではありませんが、目標は、伝え続けることです。

支援は、始めると止めようがない。難民の問題、児童養護施設の問題、路上生活の方々の問題、いじめ問題など向き合わないといけない問題が山積みです。ただで多く手を付けてしまうと、一番大事な自分の身の回りにいる家族や自分自身をおろそかにしてしまう。若い時は順番を間違えていましたが、今は私が倒れたら周りがドミノ倒しになると学びましたので、今の目標は、今日できることを丁寧にやり抜くことです。

実は、私、弁護士になりたかったんです。母が苦しんでいるのを見ていたので、私が弁護士になれば母のことを守れると思って。ビザもそうだし、母が騙されたときもそうだったのですが、私が法律を学べば弱い人を守れる。私は弁護士にとってもあこがれていました。もちろん、今もです。

—— それはうれしいですね。

私、弁護士の皆様に伝えたいことがあります。

身近な知人がアメリカで弁護士なのですが、精神的に病気になってしまいました。最初の頃は本当にキラキラしていたのですが、日に日に苦しんでいるように感じました。本当に弁護士はとても大変な仕事だと聞いています。皆様は誰よりも身を削って、自分の魂の中でいろいろな人のことを背負い続けていくのだと気付かされました。

だからこそ、ご自分の心が悲鳴を上げたときは、立ち止まれるのなら、立ち止まってほしい。どうか、心を大事にしてください、アナタ自身のためにも。

プロフィール サヘル・ローズ

1985年イラン生まれ。7歳まで孤児院で過ごし、8歳で養母とともに来日。高校生の時から芸能活動を始める。主演映画「冷たい床」がミラノ国際映画祭で最優秀主演女優賞を受賞。映画、舞台、テレビ等で活躍する傍ら、社会的な支援活動にも熱心で、2020年アメリカで人権活動家賞を受賞。